

1894 Vision

ルドン、ロートレック展

2020/11/14 三菱一号館美術館

1894 ヨーロッパの美術の様子

19世紀のヨーロッパは社会的にも美術界においても大きな転換を迎えた時代です。経済面では産業革命が起き、中産階級が生まれ、都市化が進みました。政治的にはナポレオンの進軍をきっかけに民主化と民族運動が進み、領土が再編されました。

印象派

美術の世界では1874年に最初の印象派展が開かれ、アカデミー一辺倒だった芸術の世界に新しい潮流が生まれました。印象派は見たものを見えたまま描く、というコンセプトで描き、当時の芸術界からは「まるで下絵のようだ」と批判されましたが、その後主流になっていきます。印象派はその「瞬間」と同時にその「時代」を描こうとしました。神話や聖書といった過去や想像の世界ではなく、現在のパリの様子を描こうとしたところが以降の芸術に大きな影響を与えています。当時主流となってきた汽車と駅や、郊外での休日を楽しむ人々、オペラ座で観劇する人々などを描き、時代をそのまま作品に反映したのです。歴史画を最上位と捉えたアカデミーの潮流からは大きく離れています。また、印象派は時代を反映して中産階級の人たちを題材に描きました。これも神や貴族などを主題にしたアカデミーと比較すると、よりリアルな時代描写になりました。この印象派の取り組み

が、今回の展覧会の主役の一人であるロートレックなど、大衆文化を主題とした作品の土台となります。

ポスト印象派

1880年代後半になるとゴッホやゴーギャン、セザンヌといったポスト印象派たちが活躍し始めます。ポスト印象派が目指したのは「本人にどう見えるか」という点です。画家個人の主観と感情が入ってくるところが特徴です。モネなどの印象派は「目に見えたまま」ですが、ポスト印象派たちは「自分の心にどう映ったか」が重要です。従って、ゴッホやゴーギャンは実際にありえない色を使って表現しました。大地が赤かったり、麦畑が紫であったりするのはこのためです。19世紀末には同時に「象徴主義」が流行した時代でもあります。ギュスターヴ・モローは「目に見えたものは描かない」と自分の想像を題材としました。今回取り上げられているルドンはこの流れを汲み、神話に基づく幻想的な世界を描きました。

大衆芸能

この時代のもう一つの大きな特徴は、大衆文化です。ルノワール「ムーラン・ド・ラ・ギヤレット」のように大衆のためのカフェに人々が集いました。オペラ座でも連日オペラやバレエが開演されましたが、同時にサラ・ベルナルをはじめる大衆を対象とした舞台も人気を博しました。また、モンマルトルでは「ムーラン・ルージュ」など夜の娯楽が盛んになり、多くのダンサーや歌手、曲芸師などが活躍しました。こういった大衆の舞台は現代のインスタグラムのようにポスターで宣伝されます。趣向を凝らしたポスターが生まれました。ロートレックやミュシャなどはこのポスターのデザインで一躍人気となります。

出版と挿絵

大衆文化の中には文芸作品も含まれます。ユーゴー「レ・ミゼラブル」が大流行したのは1864年。大量に出版され多くの人の手に渡るようになりました。挿絵もこの流れで大きく広がり、芸術として二流の扱いだったのが、大衆文化として「人気」という地位を獲得します。また、ファッション雑誌が生まれたのも1864年。サロンなどに出版される芸術作品とは別に、大衆のための大量生産される媒体での「グラフィック」が登場します。今回の展示でもルドンのモノクロームの傑作「夢の中で」や、ヴァロットンの版画が展示されています。二次的な扱いだった版画も版画集として「レストンプ・オリジナル」やゴッギャンがタヒチの滞在を描いた「ノア・ノア」などが出版されました。

ナビ派とクロワゾニズム

19世紀末から20世紀初頭にかけて生まれた様式の中にナビ派があります。ナビ派は、ゴッギャンのように、はっきりした輪郭線でフォルムを区切り、それを鮮やかな色で塗り分けた描き方を参考に発展した様式です。このはっきりしたフォルムの分け方が七宝焼きに似ているため「クロワゾニズム（七宝焼き風）」の名前がつけました。この背景には日本の浮世絵が大きく影響しています。浮世絵ははっきりした輪郭線を用い形を際立たせ、版画のため輪郭線の間の色合いも鮮明です。ナビ派が目指したもう一つの特徴は、装飾と芸術作品の境目を無くしたことです。16世紀以降の西洋では、実用品のデザイン（家具など）は芸術に劣るものとして扱われました。19世紀に入り、まずイギリスで民芸運動（アーツ・アンド・クラフツ）が起き、ウィリアム・モリスやラファエル前派の芸術家たちが実用品のデザインに取り組みました。大量生産、大量消費が進む中、職人が作った芸術性の高い実用品を使うことが生活を豊かにすると考えたのです。フランスでもナビ派たちは、インテリアを飾るデザイン性の高い絵画や、反対に絵画を家具に仕立てた作品を制作しました。

日本での洋画の発展

日本でも19世紀は明治維新が起こり、文明化、欧米化への道を辿った時代です。日本で最初の国会が開かれたのが1890年、三菱一号館の建物も当時最先端のオフィスビルでした。西洋に追いつけ、追い越せの中で、美術作品も文明の対象となりました。ヨーロッパでは浮世絵が芸術の世界に大きな影響を及ぼす中、日本では油彩画への取り組みが進みます。高橋由一の「鮭」や「花魁」は日本で最初に油彩画に取り組んだ作品です。その後、東京芸術学校（現在の東京芸大）が設立され、日本画に並行して洋画の教育も登場します。黒田清輝など実際にヨーロッパで学んだ画家が教鞭をとりました。当時ヨーロッパで主流だった印象派のルノワールの影響を、色彩や主題、ポーズなどに見ることができません。裸婦が公然と描かれるようになったのもこの頃。今回の展示会にも日本で描かれた初期の裸婦像が展示されています。また、日本の神話を題材とした洋画も生まれました。青木繁の「わだつみいろこの宮」や今回出展の山本芳翠「浦島」などは、日本の神話や昔話を題材に、ヨーロッパで伝統的に描かれてきたギリシャ神話の作品のように描かれています。これには、ヨーロッパのような絵画を目指す、という意図以外に、日本の神話をギリシャ神話になぞらえ、日本がヨーロッパ同様、歴史と文化、文明を持った国であることを示したのです。